

平成21年度スーパーバイザー事業報告書

鳥取市立北中学校

○研究テーマ

『自治力を高め合う集団の育成と豊かな学びの創造』
～高め合い、認め合い、鍛え合う生徒の育成～

1 研究のねらい

校訓	めざす生徒像	求める具体的な姿や状態
真理	「高め合う」生徒	○一生懸命勉強する生徒 ○共に学ぶ喜びを大切にする生徒 ○学校や自分に誇りを持つ生徒
敬愛	「認め合う」生徒	○人の意見をしっかりと聞く生徒 ○場にふさわしい判断ができる生徒 ○大切に物を使う生徒
根性	「鍛え合う」生徒	○最後までやりきる生徒 ○自分の良さを磨ける生徒 ○生徒会活動・部活動を頑張る生徒

を達成するために、

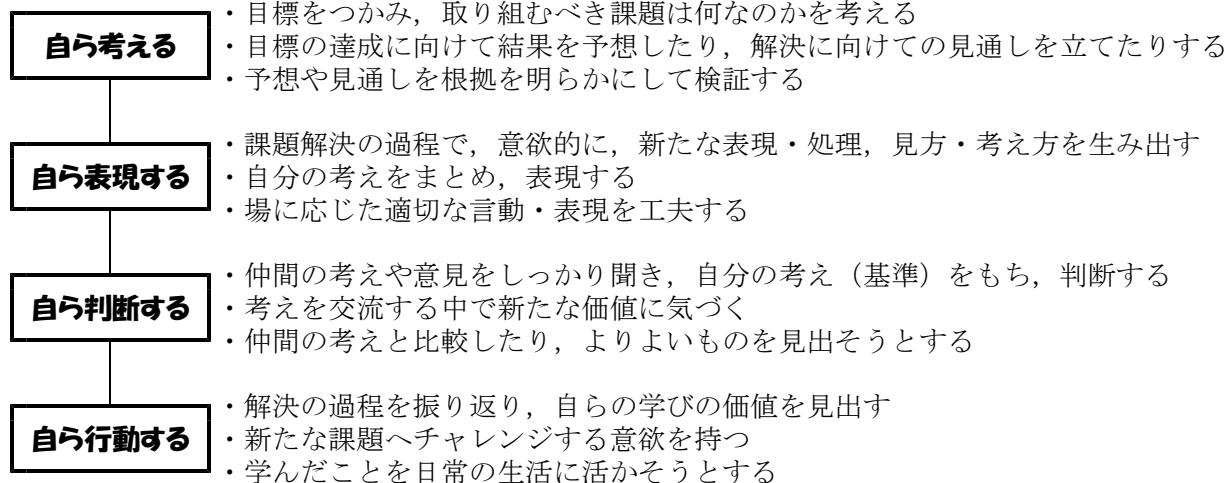
自治力・・・他とかかわりながら、自ら考え、表現・判断し、行動する力
豊かな学び・・・単なる知識の習得ではなく、喜び・感動・達成感のある学び

の2つを本年度の研究のキーワードとし、研究テーマを標記のように設定した。

学校行事や部活動等の場面における本校生徒のがんばりはめざましい。しかし、そのがんばりが普段の生活や学習の場面で生かされていないことがこれまでも反省として挙げられてきた。

自治力とは学校生活のあらゆる場面を通して育んでいくものである。本年度は日々の授業の場面においても「自治力」（他とかかわりながら、自ら考え、表現・判断し、行動する力）の育成をめざしていくことを考え、授業改善を本年度の取り組みの中心に据えることとした。そこで、授業の場面における自治力と豊かな学びについて、次のように考え、授業改善をめざしていくこととした。

<自治力とは>



<豊かな学びとは>

○教室を学ぶ喜びに満ちあふれた空間に

新しい知識を得る喜び、できなかったことができるようになった喜び、探究する喜び、自分の考えを伝える喜び、他のよさに学ぶ喜び、「おーすげえ!」、「きたーっ!」・・・

○「課題」に立ち向かい、それを解決する学習・・・困難を乗り越える成功経験を積む

適切な問題場面、教師の適切な支援、価値付け、練り上げによる価値の共有、価値の深化、新たな価値の創造、次の課題への意欲の喚起

2 研究の内容とスーパーバイザーの役割

(1) 校内授業研究会での実践 ～スーパーバイザー矢部先生の関わりの中で～

本年度の研究主題のもと、3つの研究推進の柱を設定し、その1つである「評価を生かした授業改善に取り組み、指導力の向上、学びの充実を図る」ために、次のように考えた。

授業構成にあたって大切にしたいこと

- 生徒の実態から出発する目標の設定
- 目標を達成している生徒の活動の想定
- 目標に向かう生徒の活動を促し、高めるための教師の支援の想定と評価
- 集団討議場面で検討する課題の設定と構成
- 活用場面の設定、評価問題の吟味

そのよさは・・・

生徒にとって…学びの改善

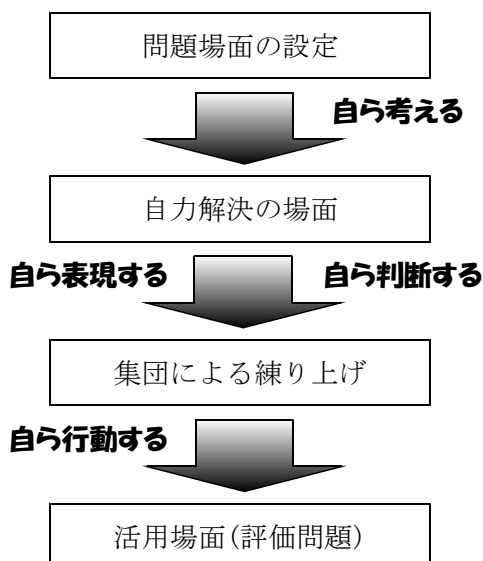
- 自治力を高めることができる。…自ら考える、自ら表現する、自ら判断する、自ら行動する
- 教師にとって…指導の改善
- 活動で想定することにより、目標の達成が明確になる。
- 活動に対応する支援を想定することで教師の関わりが明確になる。
- 授業後の振り返りのよりどころが明確になる。
(活動の想定の妥当性、支援の妥当性、集団討議場面の妥当性・・・)
- 授業が再現可能になる。改善の視点が明確になる。

これらのことがらを具体的な授業の形として実現させていくための授業構成について、具体的な実践と検証を通して考えていくこととした。

その1つの試みとして、問題解決型学習について研修することとした。スーパーバイザーの鳥取大学地域学部矢部敏昭教授をお招きし、校内授業研究会として実施した。

☆問題解決学習についての提案

問題解決学習の流れ



○授業は大きく4つの場面で構成が考えられる。

第一は、問題場面が提示され、それにより、生徒が課題を発見したり、問題解決に向けて推測する活動を展開する場面である。

第二は、生徒が自力解決の中で、推測をもとに推論を構成し、展開する活動や、新たな意味づけをする活動を意図している。ここでは生徒個々に対する教師の支援が重要である。生徒に期待する活動を引き出すこと、より質の高い活動へと変容させること、自らの手続きを振り返らせること、等の支援が考えられる。そして、これらの支援のプロセスは、次の集団による練り上げの場面においても重要となる。

第三は、集団による練り上げの場面である。自力解決場面での活動・思考を共有したり、さらに高めていくことを意図して展開する。ここでは、自力解決場面における支援を柱に、生徒の活動によって導かれた考察を体系化していく。

第四は、生徒がこの時間で学んだことがらのよさや原理・法則を活用したり、問題場面を拡張条件を変えたりする活動を展開する場面である。

授業を構成するにあたり、本時のねらいの明確化、目標を達成している生徒の活動の想定とそれを引き出す教師の支援の明確化、練り上げの構成と教師の支援の明確化、活用場面（評価問題）の位置づけの明確化を意図した。

公開授業では、

- ・本時のねらいの設定…生徒の実態に対し、ねらいの設定は妥当であったか？
- ・生徒の活動の想定…期待される生徒の活動が実現されていたか？
- ・教師の支援…教師の支援は有効に生きてはたらいっていたか？
- ・練り上げの構成…集団討議はねらいの達成に向けて有効に構成されていたか？
- ・活用場面…本時の学習内容を活用する場面として適切であったか？
- ・評価…本時のねらいが達成された授業であったか？
- ・他教科では…取り入れられる要素はどのようなところか？

という視点で参観し、その後の研究会の中で協議を行った。研究会の中で、あるいは研究会後の感想の中で、「自治力」のとらえ方について数々の意見が出された。

授業の中で「自治力」をどのようにとらえるか…授業作りに向けて

どのような学ぶ姿を目指したいか、教科を超えて目指したいこと、教科独自でこだわりたいこと、等の先生方の記述の中で・・・

- ・自分の世界を広げる。
- ・自分の考えていること、自分の思いを発信する力を身につける。
- ・英語は「教科で学んで覚えること」、ではなくて、「コミュニケーションの手段」。
- ・技術・家庭科では、段取り力。
- ・先の見通しをもって、生活する力をつける。その為にはまずは基礎・基本の習得も必要。
- ・生徒自らが「課題」に向かって取り組み、教え合ったり、質問し合ったりして、集団として学ぶ姿。
- ・自力解決の意欲、間違いを恐れない姿勢、表現しようとする姿。
- ・自分自身で考えて行動するのに加え、それを集団の中で活かせるようになること。
- ・体育は、「関わり」をもっとさせていきたい。「教え合う」「声をかけ合う」「助け合う」など。支え合う、思いやる、気づいて自ら動く。(体育を学ぶことを通して)

スーパーバイザー矢部先生の指導助言の中で・・・

- ・「わかりません」が言える。
- ・困った子が動ける、困った子を助けられる。・・・集団でかかわって学ぶ。個は集団に支えられる。
- ・注意し合える、学び合える。・・・「自治力」は学び合う技術
- ・自分たちのために自分たちが問題をつくる。
- ・自分たちの学び方を自分たちで選択できる。・・・子どもが判断する場の設定
- ・「豊かさ」とは他者を取り込むこと・・・広く、深く

(2) 授業公開期間での実践

これらの意見や指導助言の内容をもとに、各教科で「自治力の育成」と「豊かな学びの創造」をめざし、授業実践を行うこととした。6月22日から7月3日の期間に授業公開期間を設定し、その期間を中心に公開授業を行い、お互いが参観できるようにした。

それぞれの教科の中で「自治力」のとらえ方について考え、生徒に期待する学びの姿を明らかにすること、そして、授業実践の中で、それぞれの教師のチャレンジのポイント（ねらいの設定や生徒の学びの姿の想定、問題解決型学習の構成や学び合いの設定、関わりの方の設定、「自治力」への迫り方等、授業実践のポイントや参観のポイント）を明確にし（自己目標の設定）、指導案の中に位置づけることとした。

また、授業参観にあたっては、参観者に次のような項目で簡単に感想を授業者に返すようにした。

<ここがステキ！>…よかった点

<こうなるともっとステキ！>…改善されるとよい点、授業者への提案

<これ、いただき！>…自分の授業に取り入れてみたい点

さらに、授業後には、

※授業を終えて

「私のチャレンジ・・・本日の授業のポイント」に照らしての授業を振り返り、自己評価

※参観者からのコメント

・よかった点、改善すべき点

※他の先生方の授業から学んだこと、取り入れてみたいこと

※私の授業改善プラン・・・一歩前進するために取り組んでいきたいこと

として、振り返りを残していくこととした。

(3) 英語科の取り組み ～スーパーバイザー田尻先生の関わりの中で～

英語科では、教科の目標を

自治力の育成 ～主体的な学びと生徒同士の関わりを通して～

と設定し、

① 生徒が主体的に学び、頭を使い、自分の思いを発信できる発問の工夫

② 生徒同士の関わり合いを増やし、共に学び、力を伸ばしていく指導法の工夫

を取り組みの柱に挙げた。

5月22日 スーパーバイザーの関西大学 田尻悟郎教授、東部教育局 竹内通恵指導主事、鳥取県教育センター 笠見隆志指導主事をお招きし、北中英語科ワークショップを実施した。その中で、自分たちが事前に考えた目標や取り組んでいきたい内容について、助言をいただいた。

英語科目標 ①英語で自分の世界を広げる力をつける（自己表現力）
②入試に困らない得点力をつける

- ・ どのような材料（新聞、テレビ）を使って、どう教材にしていくのか、その準備はできているのか。
- ・ 具体的な方法が見えてこない。
- ・ 活動の必然性があるか。
- ・ 機会はあるか。その機会は均等か。
- ・ 授業の中でできることは限られているので、家庭学習にどうつなげるかがポイント。そしてそれをどうチェックし、どう指導していくか。
- ・ 校内の「自治力を高め合う集団の育成と豊かな学びの創造」という研究主題に沿って、英語科でも研究をすすめてはどうか。
- ・ 教科書の使い方を研究すべきである。
- ・ 各学年の柱 中1—語順、中2—接続詞、中3—後置修飾
- ・ 先生が活躍する授業は退屈。教えず気づかせる。こどもが気づく、考える、発見する、学ぶためのしかけをたくさん用意するのが教師の仕事。（教師のエネルギーの使い方は、準備に90%、授業中の我慢&観察に10%）
- ・ 教科書の使い方を考える。同じ活動をするのは3回まで（あきさせない工夫）。
- ・ 目標は、「～できるようになる」「英語を使えるようになる」毎時間何かができるようになる、できた！言えた！という経験の積み重ねが重要。
- ・ 情報のやり取りをしたい、これを言いたい、という気持ちがないと、英語で話す（書く）段階にならない。
- ・ 自分が感動する（心が動く）授業をすることが大切→自治力のある、感動のある授業をし、生徒の様子を担当の先生に伝える→学年を育てる、生徒会執行部を育てる視点を忘れない

これらの指導助言をもとに授業実践を積み重ね、9月11日に研究授業を実施した。田尻先生にも参観していただき、事後指導をいただいた。

<学んだこと>

- ・ 「理解→応用→習熟（覚える）→発展」の活動をさせる。最低限「習熟（覚える）」までいくこと。また、覚えさせていないと次のstepにいけない。
- ・ 教材を使おうとする、調理法を工夫することが大切。（それが発問研究）ページに合う調理法を見抜く力をつける。
- ・ 教師が活躍する授業ではなく、生徒が考え、活躍する授業を作ることと、そのための準備が大切。
- ・ 教科書（全種類）をそろえて、他社の教科書や高I、IIの教科書が自力で読めるかどうか、に使う。（生徒が持っている教科書はあくまで基本）
- ・ トップ層を伸ばす！そのために、例えば活動、課題が終わった生徒が次のステップに進めるように準備をしておく（e.g.他社の教科書のコピー、入試問題、赤本・・・1年から触れさせ、意識を高める）
- ・ 英語はスポーツと同じ。見本を見たら、あとは個人のトレーニングが大切。
- ・ 何か活動を行うときには、生徒にどういう英語を使わせたいかを考えて、活動に使う単語や表現・場面などを選ぶ（ただ単に思いつきではなくて）。
- ・ クラスルームイングリッシュで、どんどん新出文法・表現を



入れていく。教科書で出てきたときには、もう知っている状態に仕組む。

<成果>

- ・理解して終わりではなく、「発問→その後の習熟活動」という授業の流れができた。
- ・難しい問いだとやる気をなくしたり、分からなくて活動が止まってしまうことを心配していたが、逆に友だちと相談しながらよりよい答えを探そうと意欲的に活動する姿が見られた。
- ・自分たちで工夫をしながら、意欲的に英語を習得したり、発展的な活動に取り組む姿が見られた。

<課題>

- ・活動をたくさん入れようとしたが、まだまだ時間の確保ができていなかった。教師が活躍しすぎず、生徒が活動しながら英語を習得していく時間の確保の工夫が必要である。
- ・教師の教材研究、内容把握、英語力（表現、発音など）の大切さを再認識した。自分の勉強も怠ってはいけない。
- ・「発問→習熟」を今後も継続しつつ、「習熟→発展」の授業も考えて実践していきたい。

<その後の取り組み>

- ・生徒の活動をどう増やし（めざせ2倍!）、教師のでしゃばりをどこまで減らし、生徒が練習しながら力をつけさせることにチャレンジしようと、各学年で少しずつ実践し、情報交換を続けた。
- ・中学校英語教科書（全社）をそろえて購入。速読、内容把握（応用）に使用した。



3 反省と今後の課題

学校生活の大半は授業である。日々の1時間1時間の授業を生徒にとって実りあるものとしていくことが学校生活の基盤であると考え、『自治力を高め合う集団の育成と豊かな学びの創造』～高め合い、認め合い、鍛え合う生徒の育成～のテーマのもと、日々の授業の充実と工夫改善に取り組んできた。

ねらいを達成している生徒の学ぶ姿を具体的にイメージし、それを実現させる授業の構成を追求した。とりわけ、

- ・生徒の実態から出発する目標の設定
- ・目標を達成している生徒の活動の想定
- ・目標に向かう生徒の活動を促し、高めるための教師の支援の想定と評価
- ・集団討議場面で検討する課題の設定と構成
- ・活用場面の設定、評価問題の吟味

について意識し、授業構成を考えるようにした。

目標を達成している生徒の活動（期待する生徒の活動）を引き出すために、教師の関わりのあり方や生徒同士の関わり方を工夫してきた。具体的な実践としては、

・問題解決学習の設定

多様な考え方が引き出せる課題を設定し、自力解決学習→集団による話し合い学習のプロセスを位置づける。

・ペア・グループ学習の導入

考えの共有や高め合いなど、ねらいに即して形態を工夫する。

・かかわりを促す声かけの工夫

肯定的な評価や場面に応じた個や集団への声かけを工夫する。

のようなものが挙げられる。生徒同士の教え合いやペア学習、話し合い、思いの伝え合い等を積極的に取り入れた学習が意図的に展開されるようになってきた。

本年度の実践研究を通しての成果として、生徒の姿の変容が挙げられる。わからないところを友人に尋ねたり、教え合ったり、協力して問題解決にあたる姿が見られるようになってきた。授業を通じた生徒の「自治力」の育成に向けて、一歩踏み出したといえよう。教師の支援や友人との話し合いをからめながら、自らが主体的に解決活動に取り組もうとする姿が随所に見られるようになってきた。

また、授業の中で問題解決、話し合いの場面を意図的に設定するようになったことで、他の場面、とりわけ生徒会活動での変容が見られるようになった。本校では、運動会や学習発表会、生徒会行事の折に、振り返りの集会を行っている。行事でのよかった点やがんばり、反省点や課題等について意見交換をし合う。全校生徒の前で自分の思いを発表するのである。本年度の生徒の姿として、自分の言葉での語り、先輩や後輩、友人の発表につなげての語りなど、生徒同士の語り合い、思いの伝え合いが実現している。また、このような集会を開くに当たり、学級や学年、教科等で振り返りの視点の明確化や価値付けを行い、全体の方向付けがなされている。そのため、生徒同士だけでなく、教師の思いも生徒と共有することができ、語り合う学級、語り合う学年として、思いを伝え合う集団に高まりつつある。教師の思いと生徒の思いの方向が一致してきている実感を持っている。

行事でのがんばりを普段の生活の中に生かすことの不十分さと重要性が指摘されている。逆に、教科の学びを通して得た問題解決の筋道の作り方や方法、ペア学習や話し合いのよさから学んだ「思いの語り合い」を普段の生活の中に生かしていく発想も必要であろう。

今後は、「学習」と「生活」のより豊かな結びつきを模索してみたいと考える。

4 おわりに

本年度は矢部先生と田尻先生の2名の先生にスーパーバイザーとして本校の研究推進に関わっていただき、本校がめざしている「自治力の育成」と「豊かな学びの創造」に向け、有益なアドバイスをいただくことができた。

その中で私たちは、

- 生徒は集団の中でかかわって学ぶ。個は集団に支えられる。
- 授業は、生徒が自分の才能を発掘し、できることを増やす場で、教師はそれを支援する役である。
- 発問や指名の目的を子どもの立場になって考える。
- 互いに知りたい、伝えたいという気持ちにさせる声かけがあれば、生徒は自然に話し始める。

ということを学んだ。主体的に学ぶ生徒の育成をめざし、継続して実践研究を積み重ねていきたい。

最後に、本年度本校の研究に関わっていただいた矢部先生、田尻先生の2名の先生、そのお世話をいただいた教育センターの笠見指導主事、本校の研究推進に多大なご尽力をいただいた東部教育事務所竹内指導主事に深く感謝を申し上げます。